

予知というウソ

「週末寸言」原稿 2011210

1969年、松代群発地震を契機に地震予知連絡会という組織が国土地理院内につくられた。「予知」などというから神意を伺う会議かと思いきや「短期の実用的地震予知をするものではない」のだそう。それにしても「予知」を冠しながら、予知するものではないとは分かりにくい。しかも、阪神淡路大震災のような大災厄を見過ごして16年、その上さらにこの度の巨大地震についてもいささかも「予知」しなかつたとなれば何をかいわんやである。

こういう類の学術研究には民間企業は支援しないから、これらの研究者は莫大な研究費を国に出させ続けた。それというのも、「地震・雷・火事・親爺」、怖いものの筆頭にある地震について、それが「予知」できる「らしい」と聞けば政府もお金を出さないわけにはいかない。

静的に地球深部にひずみが発生していることはストレージングを入れれば分かるから、ひずみ量が大きいところには地震が近々おこることは想定できても、それがいつ

地震に発展するかは分からない、というのがこの間の結論。どうも、地震というのはいわゆる「決定論的力オス現象」で、巨大クジラが活断層に突撃しても何も無いのに、ナマズが寝返りを打っただけで大地震になるという類のものらしい。「北京の空に舞い上がった一羽の紋白蝶がフロリダにハリケーンを起こす」気象学と同種のもの。ハリケーンならその発生から到来まで時間がかかり、その進路は南の海から北に向かって移動するという方向性がある点で、発生予知は不能でもその後の「進路予想」は可能だ。だが、地震はそうはいかない。

科学の看板を掲げながら、予知能力を発揮したことのない学問にもう一つ「経済学」がある。リーマンショックもギリシヤ国債の不信もそれが始まるまで「予知」されてはいなかった。スミス、マルサス、マルクス、ケインズ、フリードマン、彼らは山のようには理論を発表したが、株価、為替、物価に賃金、何一つ予測が当たったためしがない。それなのに投機筋はたらふく儲かっているという。彼らは市場の暗闇にうごめくナマズか紋白蝶のようなものらしい。